

ALESCO

No.13
February, 2015

アレスコ【ALESCO】とは古代ラテン語で「成長する、発展する」という意味です。

INDEX

写真で綴る新入生宿泊研修会	02
保健学科長挨拶	05
チーム医療と多職種連携を合言葉に	
卒業生だより(第4回)	06
助産師として活躍する卒業生	
感染制御に携わる臨床検査技師として	
トピックス	08
保健学科学生と地域住民がともに活動する災害弱者への防災への取り組み	
実習紹介	09
母性・小児家族看護学講座/地域・精神看護学講座/病態検査学講座	
平成27年度学年暦/平成27年度学級委員	12
平成25年度後援会事業報告/平成26年度後援会役員名簿	13
平成26年度後援会事業計画/編集後記	14



鳥取大学医学部の近く「湊山公園」では毎年4月、約450本もの桜が咲き「米子桜まつり」が開催されます。期間中は、おおぜいの人で賑わい、屋台やイベントが、よりいっそう賑わいを盛り上げています。陽気に誘われて可愛らしいひよこも列をなして、とび出していきます。春ももう、すぐそこまで近づいています。「米子桜まつり」へふうわりと出かけませんか？



写真で綴る 新入生宿泊研修会

これは、大学入学後様々な悩みを抱きやすい新入生を、早く大学生活になれるように支援するための宿泊研修行事ですが、同時に「大学入門ゼミ」という必修の授業科目でもあります。「大学入門ゼミ」では、課題の発見・探求に必要な基礎知識・技法を学ぶことによって、自主的・継続的な学習能力を養うとともに、教員と触れあい、学生が互いに学びあうことによって、大学生活を営む上で必要なコミュニケーション能力・チームワークを培います。

平成26年度は4月19日(土)・20日(日)に実施いたしました。宿泊施設は「大山青年の家」です。最初は緊張した顔つきでしたが、班に分かれて話をしたりして、少しずつ楽しそうな表情になってきました。

その一端をスナップ写真で紹介いたします。



環境教育の授業



グループワーク1



グループワーク2



集合写真



バスの中にて



アドバイザーの皆さん(2年生)





食事風景1



食事風景2



ヒューマンコミュニケーション



病院見学出発前1



病院見学出発前2



病院見学(検査)



病院見学(看護)



2日間お疲れ様でした!

チーム医療と 多職種連携を合言葉に

保健学科長

花木 啓一

平成12年4月に第1期入学生を迎えた鳥取大学医学部保健学科は、この春には第12期卒業生を送り出します。今までに保健学科が輩出した看護学士と保健学士は、1500名を超えるまでになりました。卒業生の多くは、高度化の進む医療、福祉、保健の分野で、看護師、保健師、助産師、臨床検査技師として、医療機関、企業、自治体等の幅広い職域でそれぞれ活躍しています。また、卒業後に本学にも設置されている保健学専攻などの大学院を修了して、より高度の技能を身につけ、教育者の道に進む卒業生も多いです。今日まで、保健学科がその使命を果たしてくることができたのも、卒業生をはじめ、保護者、後援会、同窓会の皆様方のご支援、ご協力のお陰でございますことを、改めて感謝申し上げます。

保健学科卒業生の活躍の場である保健・医療の分野は、この20～30年の間に大きな変化を遂げました。もちろん医学の進歩や医療技術の高度化による変化も十分に大きいのですが、最も大きなものは、人間社会の変化だと思われます。ご存知のように、日本の社会は、この数十年で、家の視点から個人の視点へと変化し、家父長制から一人ひとりの自己実現を目指すものになりました。現在の医療を担う世代にもこのような考え方が浸透し、それまでのいわゆるパターナリズム(医療父権主義、家父長的温情主義)の思考から、インフォームド・コンセントに代表される患者中心の思考へと変わってきました。医療現場で働く人が、「医療は誰のためにあるのか」という視点で物事を考えるようになったということでもあります。

現代医療のこの新しい思考から必然的に生まれてきたのが、「多職種連携」や「チーム医療」の考え方です。つまり、最近の医療や保健の分野では、提供すべき知識や技能が著しく高度化多様化してきたことに加えて、従来の医師—患者という単純な図式では間に合わなくなって来ているのです。私たちの保健学科では、時代の必然である「多職種連携」や「チーム医療」を合言葉に、保健・医療の分野で人との円滑な連携をとりながら高度な医療を提供できる人材の育成を目指しています。実際に、平成25年末に全国の各国立大学が実施したミッションの再定義のなかで、私たちの保健学科は、「他者とのコミュニケーション能力と、不安を抱える患者への理解やいたわりの心を持った全人的医療人」、「臨床実践力を有し、多職種連携によるチーム医療のなかで中心的役割を果たすことができる人材」を、養成すべき人材像の目標とすることになりました。現代の医療・保健の現場で生き活きと仕事をしている卒業生の、今後の益々の発展を期待したいと思います。そして、その活躍に、保健学科で受けた教育や鳥取大学で皆と過ごした生活経験がわずかでも寄与しているなら、私たち教員の無上の喜びでございます。

最後になりましたが、今後の保健学科の大きな飛躍に向けて、皆様方のさらなるご指導、ご支援を賜ることができますよう、よろしくお願い申し上げます。保健学科に入学したすべての学生が、さまざまな人と出会い、知識や技能を吸収し、人として大きく成長して卒業していかれることを願います。



助産師として 活躍する卒業生

看護学専攻 第6期生
宮永 絵理香



こんにちは。鳥取大学医学部保健学科看護学専攻の第6期生の宮永絵理香です。私は大学卒業後、現在の職場である鳥取大学医学部附属病院に就職しました。在学中に助産コースも専攻し助産師の資格を取得していたため、現在は産科病棟で助産師として働いており、今年で6年目になります。

私が助産コースを専攻しようと思ったのは、「せっかくなら在学中に習得できる資格はとっておこう」というような軽い気持ちからでした。特に強い志があったわけではなかったので、正直何となく授業を受けていたこともありましたが、いざ助産実習に入ってみると、産まれてきた赤ちゃんとお母さんが初めて対面する瞬間に感動し、その場に立ち会えるということがすごく素晴らしいことだと感じました。もちろん、実習中に怖い場面や大変なこともありましたが、実習が終わる頃には、素直に「頑張ってたよかったです」と思えました。その後は、同期と共に受験勉強を乗り越え、なんとか助産師の国家試験に合格することが出来ました。

鳥取大学医学部附属病院に就職し産科病棟への就職が決まった時、自分が社会人として働けるのかどうか不安でいっぱいでしたが、何より助産師として働けることが楽しみでした。最初は合同研修で病棟にいないことが多く、正直早く病棟で働きたい気持ちが強くありました。しかしいざ病棟に入って業務を始めると、社会人、助産師としての責任の重さに押しつぶされそうでした。大学在学中は「実習中の学生」としての患者さんとの関わりでしたが、自分が病棟のスタッフとして働くということは、自分の曖昧な知識や技術が患者さんを危険にさらしてしまう可能性も高くなるということです。そのことを改めて自覚してからは、患者さんとの関わりや一つ一つの仕事を丁寧に、確実にやるよう心がけて仕事をしています。

入職当時、私が心の支えにしていたのは、プリセプターさんと同期のみんなの存在です。鳥取大学医学部附属病院では、新人看護師一人一人に、「プリセプター」という指導者の看護師がついてくれます。もちろんそれぞれの勤務もあるのでずっと一緒に勤務をすることは出来ませんが、いつも私のことを気にかけて声をかけてくれる先輩の存在は、私の大きな支えでした。また、私には同期入職で配属された助産師が3人いました。誰かが困ったり辛い時にはみんなでご飯を食べたり話したりしながら、乗り越えていました。病棟の他の先輩方もいつも優しく指導して下さり、とても良い雰囲気の中で仕事をさせてもらっていたように思います。

しばらくして病棟の業務に慣れてからは、分娩介助にもつかせてもらえるようになりました。最初は先輩方に付きっきりで指導してもらいながらでしたが、少しずついろいろな症例を経験し、今では一人で分娩を取り扱うことが出来るようになりました。今でも、分娩直後に赤ちゃんとお母さん、お父さんが幸せそうに触れ合っているところを見ると、助産実習で感じた感動を思い出します。

入職4年目からの2年間は新生児医療センターに異動し、NICU・GCUで2年間新生児医療についても学びました。出生時の状態がよくなかったり、病気を持って産まれてくる赤ちゃんも多くいるため、新生児看護について学べたことは今後助産師として仕事を続けていくために大事な経験だったと思います。

これまで様々な経験や出会いがありましたが、その一つ一つがあったからこそ、今も私は助産師として仕事が出来ているのだと思います。これからも、辛いことや苦しいこと、迷ったりすることがたくさんあると思いますが、周囲のみなさんへの感謝を忘れないように、楽しく笑顔で仕事を頑張っていきたいと思っています。

感染制御に携わる 臨床検査技師として

検査技術科学専攻 第4期生
森下 奨太



私は検査技術科学専攻4期生の森下奨太と申します。このたび縁あって第4回の卒業生だよりを執筆させて頂くこととなりました。大学院の修士課程(現博士前期課程)を修了後、鳥取大学医学部附属病院に入職し、約6年が経過しました。大学院では超音波や神経生理といった生理機能検査に関する研究をしておりましたが、職場では微生物検査部門に配属されました。国家試験から2年のブランクもあり、初めの頃は忘れた知識を取り戻す毎日でした。その後も四苦八苦しながら、なんとか現在に至ります。

微生物検査室は、様々な感染症の原因病原体の特定や治療薬の感受性検査が主な業務です。同じ病原体であっても症例によってその意味合いが全く異なるため、高い専門性が求められる分野だと思います。また新しい薬剤耐性菌や感染症の出現によって、抗菌薬感受性の判定基準や検査法、更には法律まで改正されるため、日々最新の知見を得た上での対応が求められます。

今年度より検査部に加え、感染制御部およびICT(Infection control team)にも席を置いています。感染制御部は医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師の4職種で構成されており、病院内の様々な感染症の診断・治療・感染制御をトータルにサポートしています。感染制御部員としての私の主な仕事は、院内の菌検出状況や薬剤感受性成績の報告、JANIS(厚生労働省院内感染対策サーベイランス事業)等の各種サーベイランス用データ作成等です。微生物検査室には院内の病原体をいち早く察知することが求められます。テレビや新聞等のマスメディアでアウトブレイク事例を目にされたことがあるかと思いますが、最初の小さな異常を見逃さず、早期から適切な対応を行うことにより院内伝播を最小限に留めることが可能となります。全体では、週2回程度の感染症診療カンファレンスにて症例検討(薬剤耐性菌検出患者・血液培養陽性患者・特定抗菌薬使用患者)を行っています。意見を交換しながら、必要に応じて診療支援あるいは介入し、感染症治療に貢献しています。週1回病棟ラウンドを行い、感染対策上問題がある点を指摘し、指導により改善を促します。

また平成24年診療報酬改定により、感染防止対策加算に加え、感染防止対策地域連携加算が新設されました。鳥取県西部地区では感染防止対策加算1を算定している3施設と、加算2を算定している6施設とが相互に連携しながら、地域の感染制御の水準を高めるように努めています。当院は加算1算定施設として指導的立場にあり、他の施設からの相談対応も行っています。このように業務は非常に多岐に渡りますが、チームの一員として参加することに対する自覚と責任を感じています。そして同時に誇りを持って業務を行っています。

皆様の中には微生物分野に苦手意識のある方も多いかと思いますが、実は私もそうでした。ですが、日々の業務の中で感染症と感染制御の難しさや奥深さに触れるにつれて興味を引かれるようになり、今では面白く感じるようになってきました。昨年度は『認定臨床微生物検査技師』、今年度は『感染制御認定臨床微生物検査技師(ICMT)』と微生物検査と感染管理に関する資格を取得しました。取得したことに満足せず、初心を忘れず日々精進しながら、院内および地域の感染制御に貢献していきたいと考えています。



保健学科学生と地域住民がともに活動する
災害弱者への防災への取り組み

防災をキーワードに 地域のつながりをつなぐ

地域・精神看護学講座

奥村 さとみ、雑賀 倫子



今回は、防災について、保健学科の学生と災害弱者の立場にある地域住民が交流を深めながらともに取り組んでいる活動についてご紹介します。

災害弱者とは、特別な人のことではなく、お年寄りやお子さん、障害をもつ方などを意味しており、とても身近な存在です。災害弱者の立場に置かれている方たちに、災害時、何が起こるのでしょうか？ 災害弱者は、避難所への逃げ遅れ、避難所での居場所のなさ、支援についての“情報”の受けにくさ等があることが幾度も報告されています。東日本大震災では、全人口の4.5%が亡くなった宮城県南三陸町において、障害者の死亡率はその3倍に近い13%（内閣府調べ）に達しました。つまり、災害弱者の防災についての問題は、いのちにかかわる問題であるといえます。この現状を打破するちからとして、地域住民相互の日頃からの“つながり”の大切さが叫ばれています。

このようなことを踏まえ、私たちは“たのしいすぎ会”を立ち上げ、本年度は活動2年目を迎えています。会の目的は、地域住民のみなさんの健康維持や生活の安全に取り組むことです。将来、地域の保健医療を担うことになる保健学科学生にとっては、障害をもつ生活者を支える視点を養いながら、災害支援へ向けた専門職としての知識と現場経験を深める機会となっています。

私たちは、防災活動とは単に防災グッズを準備することを指すのではなく、“地域のひととひとが顔と顔を合わせながら、ふれあいながら、ひとの結びつきが広がり、深まること”このつながりこそが不可欠だと考えています。地域のひと同士が大切に思いあい、つながりあうことで、自分の身体への関心が生まれ、健康維持&増進という備えや、自分のため・家族のため・隣人のための災害への備え行動につながるのではないのでしょうか。災害への備えとは、生きるんだ！という自らの意思と、生きて欲しい！と願う思いを育み、行動化していくことだと考えています。たのしいすぎ会の名前は、活動拠点である鳥取県中部の古布庄地区を代表する“伯耆の大しい”と“大杉”に由来しています。

活動は、地区全域を8地区に分け、近所の集会所をキャラバン隊のように行脚します。活動内容は『交流レクリエーション』『健康測定』『健康カードづくり』『避難食づくり&試食会』『防災語り合い』などです。25年度の参加住民数は、90名（平均年齢73.8歳）+小学生3名、参加学生はのべ46名でした。今年は更にパワーアップしています。

さらに、“避難所にもなる集会所の量はお年寄りには負担が大きい！”という参加学生の気づきから、お年寄りが量でも座りやすい『牛乳パックで椅子をつくり隊』活動も生まれました。

参加住民さんは、健康測定の結果に『今日は砂糖はやめておくよ』『歩くのがんばってみるわ』と健康への興味を示される方が多くおられます。またゲームなどで交流を図りながらの活動には、『こうして若い人と話すとストレス発散になる』『また来てほしい、楽しかった』『久しぶりにようけ（たくさん）笑いました』『健康は大事で！』などの声が聞かれます。喜んでくださる住民さんの笑顔に学生自身も笑顔になる様子がみられます。また、「お年寄りとかかわるとたのしい」「血圧を測りながら、もっと上手にかかわれるようになりたい」など、活動を通して、人とかわるたのしさをやりがい、責任感や自覚の芽生えを見出しているようです。「また元気で会いましょうね」が合言葉になっています。



母性・小児家族看護学講座

母性・小児家族看護学講座は、母性家族看護学分野と小児家族看護学分野からなります。母性家族看護学分野では、女性の一生を性と生殖という視点から見つめ、その年代に応じた健康問題を扱います。実習は、母性家族看護学実習2週間(全学生対象)と助産学実習(助産学専攻学生のみ)からなります。小児家族看護学分野では、子どもの成長や発達と小児特有の健康問題を、家族を含めた視点から扱います。小児家族看護学実習は3週間(全学生対象)で、保育園と附属病院小児総合病棟で実施します。



母性家族看護学実習

母性家族看護学実習では、女性に備わっている母性機能の側面からライフサイクル各期における看護を学びますが、実習では妊産婦および新生児・低出生体重児の看護が中心になります。

実習場は鳥取大学医学部附属病院病棟3階A・MFICU、新生児医療センターです。新生児では安全で正確、かつ愛護的看護を、妊産婦では合併症管理中の妊婦、帝王切開の術前・術中・術後と多様で緊急性の高い看護を学び、お産進行中の産婦ではバースプランに沿った援助を行い生命誕生に立ち会います。そして、出産後では母子関係形成と育児技術習得、新しい生命を迎え入れる家族の支援について学びます。

幅広いエビデンスに基づいた知識が求められ、事前学習が重要です。

助産学実習

学生は助産学実習により10例の直接分娩介助と保健指導が必須となっています。全国の国立大学法人の助産師の養成数は1大学につき約8.3名です。当大学は、約10名の養成を行ない、学生は24時間体制で実習を行っています。昼夜を通して実習が行われ、指定規則の10例の分娩介助と保健指導をこなしています。実習施設は大学病院、地域の病院、クリニックなど4-5箇所で行っています。保健指導では、各実習施設において母親学級などの集団指導の企画運営を行い、妊産婦および胎児、新生児のアセスメントやケアを中心に責任をもって行えるよう、学内演習でも日々、知識や技術を深めています。

小児家族看護学実習

小児家族看護学実習は、成長発達過程にある子どもを理解し、健康障害をもつ小児とその家族の個性に応じた看護実践が展開できる基礎的知識・技術を学ぶことを目的にしています。

実習は2種類の施設で行います。保育園では、乳幼児期の小児の保育を体験し、子どもの成長発達の特性や個々の発達に応じた援助を学びます。医学部附属病院の小児総合病棟では、1名の患児を受け持ち、患児および家族の看護ニーズを見出し、患児の成長発達段階、健康問題に応じた看護過程を展開し、小児看護について学びます。

各施設の看護師・保育士など専門職の指導・助言により、小児看護に必要な専門知識・技術、さらに多職種との連携などについて理解を深めます。



地域・精神看護学講座

地域・精神看護学講座は公衆衛生看護学、精神看護学、在宅看護学、3領域の実習を行っています。病院で療養する患者さんに限らず、広く地域で生活する人々の健康の保持増進、療養支援について学ぶ領域です。

地域・精神看護学講座の臨地実習

公衆衛生看護学担当：松浦治代教授、金田由紀子講師、徳嶋靖子助教
精神看護学担当：吉岡伸一教授、奥村さとみ講師、光田優子助教
在宅看護学担当：仁科祐子講師、雑賀倫子講師



公衆衛生看護学実習

公衆衛生看護学実習では、地域で生活する個人・家族・集団を対象に、保健・予防の視点をもって住民さんが主体性のある健康生活を送れるような支援・活動を展開していきます。公衆衛生看護学実習では主に行政で働く保健師活動の実際を総合的に理解し、公衆衛生看護の展開に必要な知識・技術・態度を学ぶことを目的としています。実習は4週間で、鳥取県西部の市町村役場（保健センター）と倉吉、米子保健所を主な実習場所として、地域での健康課題を明らかにする地域診断や住民さんを対象とした健康教育を実施し、家庭訪問、その他連絡会議や、健康教室など保健師の業務を見学・体験します。そして、現場や学内でのディスカッションをとおして体験を振り返り、保健・医療・福祉に関わるチームの一員としての保健師の独自性・専門性について学びを深めていきます。

精神看護学実習

精神看護学実習では、精神に障害をもつ人について、身体的・心理的・社会的な面から正しく理解し、社会で生活を送れるよう、個別性に応じた看護が展開できる能力を養うことを目的にしています。実習は精神科病棟に入院している患者さんを受け持ち、精神障害をもつ人へのかかわりや必要とされる看護について学びます。また、地域で生活されている精神障害や知的障害など様々な障害をもつ人が利用されている自立支援施設での実習も行い、地域生活を送るために必要な社会資源や法制度などの学びを深めていきます。

在宅看護学実習

在宅看護学実習では、病いや障がいもちながら地域・在宅で生活している療養者とその家族の生活を知り、在宅生活を支えるための看護を学びます。実習場所は米子市と境港市内の訪問看護ステーションです。訪問看護ステーションでは、訪問看護師と一緒に在宅療養者宅を訪問させて頂き、訪問看護師が提供する看護場面をみたり、ケアに参加させて頂きます。在宅実習を通して人が生活することとは何か、個別性のある看護とは何か、その本質に気づき、学びを深めていきます。



病態検査学講座

病態検査学講座は検査技術科学専攻1年次～4年次の学生を対象に11の実習を担当しています。

教員：廣岡保明教授、北村幸郷教授、鰐岡直人教授、山田貞子教授、福田千佐子准教授、中本幸子准教授、中川真由美講師、下廣寿助教、石黒尚子助教、佐藤研吾助教、松下倫子助教

生物学実験演習(1年)

動物細胞、植物細胞を標本化し顕微鏡で観察します。マウス、ラットなどの解剖を通して臓器の解剖を学びます。

病理検査学実習(2年)

生検や手術材料をはじめとする組織検査について学びます。組織検体の固定、包埋、薄切ならびにHE染色を代表とする染色法について実習します。

微生物検査学実習(2年)

主に細菌のグラム染色、培養を中心とした検査法について学びます。グラム染色による細菌の分類、細菌培養後の生化学的特徴などを実習します。

検体検査学実習(2年)

尿検査を中心とした一般検査法について学びます。実際の尿、便や髄液などに触れ、取り扱い方や保存法などへの理解を深めます。

病態生理情報検査学実習(3年)

患者の身体に直接接して行う検査(心電図検査、脳波検査、超音波検査、呼吸機能検査など)について学生同士で実習し、検査方法とともに患者への対応方法などの理解を深めます。

病理組織細胞学実習(3年)

組織検査の理解を深め、細胞診の意義や細胞像、標本作製法についても学びます。さまざまな特殊染色法を学び、免疫染色法やISH法の原理についても理解を深めます。

病原体検査学実習(3年)

細菌に加えて真菌も取り扱います。真菌染色や真菌培養も学びます。培養後の生化学的特徴なども発展学習します。

病態血液学実習(3年)

採血法に習熟します。血液細胞の数算定、形態分類ができるようになります。血液凝固反応系の検査を実習し、測定原理などを理解するとともに、異常症について検査をすすめることができるようになります。

病態免疫血清検査学実習(3年)

免疫沈降反応、ELISA、凝集反応、凝集阻止反応などの抗原抗体反応を利用した検査法を実習し、免疫反応を理解します。血液型検査、交差適合性検査などを実習し、輸血時における検査ができるようになります。

病態分析検査学実習(3年)

血液中や尿中の蛋白、糖、脂質、酵素、ホルモンなどの化学的検査法を学びます。分析機器の取り扱いを習得し、検査結果と疾病の関連についての理解を深めます。

臨床実習(4年)

病院検査部の現場で行われている実際の検体検査や生体検査を見学し、検査方法や患者とのコミュニケーション法についての理解を深めます。実習期間は4ヶ月です。



平成27年度 学年暦

■鳥取キャンパス(1年次のみ)

事 項	月 日
学年開始(前期開始)	4月1日(水)
春季休業日	4月1日(水)～7日(火)
全学共通科目説明会	4月1日(水)・2日(木)
入学式・全学新入生オリエンテーション	4月6日(月)
各学部新入生オリエンテーション	4月7日(火)
前期授業開始	4月8日(水)
月曜日の授業を振替実施	5月7日(木)
月曜日の授業を振替実施	5月29日(金)
鳥取大学記念日	6月1日(月)
前期定期試験	7月30日(木)～8月5日(水)
夏季休業日	8月6日(木)～9月30日(水)
前期終了	9月30日(水)
後期開始	10月1日(木)
後期授業開始	10月1日(木)
月曜日の授業を振替実施	10月15日(木)
冬季休業日	12月23日(水)～1月5日(火)
月曜日の授業を振替実施	1月13日(水)
大学入試センター試験準備による休講	1月15日(金)
後期定期試験	2月4日(木)～2月10日(水)
卒業式	3月18日(金)
春季休業日	3月19日(土)～3月31日(木)
学年終了(後期終了)	3月31日(木)

■米子キャンパス(2年次以上)

事 項	月 日
学年始(前期始)	4月1日(水)
進級生オリエンテーション	3月31日(火)
前期授業開始	4月1日(水)
鳥取大学記念日	6月1日(月)
前期授業及び試験終了	8月19日(水)
夏季休業日	8月20日(木)～9月30日(水)
前期終了	9月30日(水)
後期開始	10月1日(木)
後期授業開始	10月1日(木)
冬季休業日	12月29日(火)～1月3日(日) ※看護3年次は12月26日(土)～1月5日(火)
後期授業及び試験終了	2月24日(水) ※看護3年次は3月4日(金)
卒業式	3月4日(金)
春季休業日	3月5日(土)～3月31日(木)
学年終了(後期終了)	3月31日(木)

平成27年度 学級委員

■看護学専攻

入学年度	学 年	氏 名	所属講座
平成27年度	1 年	南前 恵子 教授 / 池田 智子 講師	母性・小児家族看護学講座
平成26年度	2 年	山本 美輪 教授 / 西尾 育子 講師	成人・老人看護学講座
平成25年度	3 年	深田 美香 教授 / 奥田 玲子 講師(予定)	基礎看護学講座
平成24年度	4 年	松浦 治代 教授 / 仁科 祐子 講師	地域・精神看護学講座

■検査技術科学専攻

入学年度	学 年	氏 名	所属講座
平成27年度	1 年	二宮 治明 教授 / 仲宗根眞恵 助教	生体制御学講座
平成26年度	2 年	廣岡 保明 教授 / 中川真由美 講師	病態検査学講座
平成25年度	3 年	網崎 孝志 教授 / 藤原 伸一 准教授	生体制御学講座
平成24年度	4 年	鯉岡 直人 教授 / 福田千佐子 准教授	病態検査学講座

※両専攻とも1年生については、上記保健学科教員以外に、湖山キャンパスの教員数名が学級委員として学生の指導・相談の任にあっている。

平成25年度 後援会事業報告

教育助成

入学関連

- 入学式
- 新入生オリエンテーション
- 新入生合宿研修
【平成25年4月20日(土)～21日(日)】

大学説明会関連

- オープンキャンパス
【平成25年8月3日(土)】

教育関連

- 新入生ふれあい朝食会
【平成25年4月9日(火)～15日(月)】
- 2年次学生と教員の懇談会
【平成25年4月24日(水)】
- 優秀学生表彰
- 看護学専攻・検査技術科学専攻へ助成
- 全学共通教育協力金へ助成

国家試験対策

- 看護師等国家試験対策模試
- 臨床検査技師国家試験対策模試

就職対策

- 教員による病院等の就職先への訪問

医学部国際交流助成

- 国際交流協定校との交流

文化行事援助

- 錦祭

後援会運営

- 保健学科広報「アレスコ」発行
- 後援会役員会

平成26年度 後援会役員名簿

会長・副会長・常任理事・理事・監事

役職名	氏名	専攻・年次
会長	市田 典浩	看護学専攻4年
副会長	山口 秀美	看護学専攻4年
副会長	北川 友之	検査技術科学専攻3年
常任理事	關 一恵	看護学専攻3年
理事	下原 勝利	看護学専攻4年
理事	星野 雅子	検査技術科学専攻4年
理事	藤原 茂樹	検査技術科学専攻4年
理事	花田 武	看護学専攻4年
理事	永井 友子	検査技術科学専攻3年
理事	松浦 裕美	検査技術科学専攻2年
監事	松重 嘉真	検査技術科学専攻4年
監事	森吉 まゆみ	看護学専攻3年

顧問・幹事

役職名	氏名	役職指定
顧問	花木 啓一	保健学科長
顧問	山本 美輪	医学部学生生活委員会委員(看護)
顧問	松田 明子	医学部学生生活委員会委員(看護)
顧問	浦上 克哉	医学部学生生活委員会委員(検査)
顧問	藤原 伸一	医学部学生生活委員会委員(検査)
幹事	前田 佳哲	学務課長
幹事	橋井 義文	教育支援専門職

平成26年度 後援会事業計画

教育助成

入学関連

- 入学式
- 新入生オリエンテーション
- 新入生合宿研修

【平成26年4月19日(土)～20日(日)】

大学説明会関連

- オープンキャンパス

【平成26年8月2日(土)】

教育関連

- 新入生ふれあい朝食会
【平成26年4月10日(木)～15日(火)】
- 2年次学生と教員の懇談会
- 優秀学生表彰
- 看護学専攻・検査技術科学専攻へ助成
- 全学共通教育協力金へ助成

国家試験対策

- 看護師等国家試験対策模試
- 臨床検査技師国家試験対策模試

就職対策

- 教員による病院等の就職先への訪問

医学部国際交流助成

- 国際交流協定校との交流

文化行事援助

- 錦祭

後援会運営

- 保健学科広報「アレスコ」発行
- 後援会役員会

編集後記

鳥取大学医学部保健学科広報誌アレスコ(ALESCO)第13号を発行いたしました。

「写真で綴る新入生宿泊研修会」、保健学科長より「チーム医療と多職種連携を合言葉に」とのご挨拶に続き、助産師および臨床検査技師として活躍している2名の卒業生からの寄稿文を紹介いたしました。続いてトピックスでは、地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)「たのしいすぎ会」について、琴浦町古布庄地区での取り組みを取り上げ、3つの講座(母性・小児家族看護学、地域・精神看護学、病態検査学)の実習内容を紹介いたしました。

ささやかではありますが、保護者および関係者各位の皆様には、このアレスコを通じて、保健学科の「成長・発展(アレスコ)」の姿、ご子息の学生生活の一端を感じ取っていただければ幸いです。

広報委員会委員長 藤原 伸一

[発行責任者]鳥取大学医学部保健学科後援会・鳥取大学医学部保健学科広報委員会

[発行所]鳥取大学医学部保健学科(〒683-8503鳥取県米子市西町86番地)

[発行年月]平成27年2月